

## 清流に育まれた信仰 八代（やつしろ）の殉教者



取材協力  
レンゾ・デ・ルカ神父  
(イエズス会)

日本三大急流の一つ熊本県の球磨川。上流は急流でも、下流にある八代は穏やかな清い水が今も流れています。清流に育まれた信仰を、八代で感じることができません。

八代はキリシタン大名の小西行長ともゆかりが深く、彼のもとには数多くの信者たちが集まっていました。それがいつの頃から始まったかは定かではありません。熊本領主加藤清正も最初は、キリシタンを黙認していましたが、韓国出兵の時に、八代との関係が非常に悪くなり、八代一帯の支配は半分に分断されてしまいます。1600年、関ヶ原に出陣した小西行長は敗戦の末、京都六条河原で斬首されます。主君を失った八代の町には翌年、小西行長の政敵でもあった加藤清正が、キリシタンを抑制するために日蓮宗を入れようとしています。しかし、まだこの時代は、小西行長寄りのキリシタンが多く、徳川幕府による組織的な迫害も、まだ始まっていませんでした。

1601年、加藤清正は八代の民衆に日蓮宗への改宗を命じ、圧力に屈したキリシタンの数多くの仲間たちは信仰を捨て、日蓮宗へと改宗していきました。しかし、そういう圧力にもめげず、毅然とした態度で信仰を表明し、殉教をもいとわなないキリシタンたちもいました。

その当時、殉教にあたり、処刑の方法と

していくつかのランクがありました。身分の高い人は切腹、その下は斬首刑、さらにはりつけの刑、穴吊りの刑の順です。火あぶりの刑はもっと後の時代です。

また1597年に殉教した日本26聖人の時代は、殺すことによってキリシタンへのみせしめとし、信者に怖い思いをさせることで転ばせることが目的でした。しかし、徳川秀忠の時代になると、殺すことよりも転ばせることが目的になり、処刑の方法もいじめるような形式で、とても陰険になっていきました。そんな時代の流れの中で、八代は徳川時代の最初の殉教地となります。ここでは組織的に圧力を加えられますが、下級の武士や農民たちが、堂々と権力者たちに対して革命的な振る舞いを行っています。

若い侍であったヨハネ南五郎左衛門は、一度信仰を捨てますが、心から罪を悔い、回心して1603年12月8日に熊本で斬首されます。翌日には、八代の城下（麦島の刑場）で武士であったシモン竹田五兵衛、母のヨハンナ、妻のアグネス、南の妻マグダレナとその養子のルドビコ（7歳）がはりつけの刑で殉教します。遺体は朽ち果てるまで、その場にさらされますが、その骨をヨアキム渡辺、ミカエル三石、ヨハネ服

左・八代キリシタン殉教碑、中央・キリシタン殉教の跡  
右・八代キリシタン処刑の図



部の三人がひそかに長崎へ運びます。

三人は司祭不在の時代にあつて、洗礼を授けたり、病人を見舞い、教理を教え、結婚を司式したり、慈悲役の務めを果たしていました。さらには家庭で信仰が弱くなっている人たちを励ましたり、もう一度信仰に立ち返るように元気づけていきます。この三人も1605年には捕まり、1606年にヨアキム渡辺は牢死。ミカエル三石とヨハネ服部は1609年2月4日、八代の麦島で斬首されました。同時に彼らの息子トマス三石（13歳）とペトロ服部（5歳）も処刑されました。

記録によれば、「トマス三石は身体障害があつて父の遺体のそばにひざまずき、不自由な手を右の手で胸によせて、天を仰ぎながら、首を差し出した」とあります。彼は殉教にあたり、覚悟と殉教への敬意を払っています。また迫害者たちは、身体障害者、子ども、従者をも家族の一員として、同等に扱っています。信仰において、みんな平等であると、迫害者側も認めているかのようなようです。

彼らの遺体は有馬に運ばれ、その後長崎のトードス・オス・サントス教会（今の春徳寺付近）に埋葬され、その後1614年

に遺骨は追放された宣教師によってマカオに運ばれました。1995年、マカオの中国返還の折、遺骨は再び日本に戻っています。

過酷な迫害に遭つても、純粋な信仰心が清く、静かに流れています。

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
ヨハネ南五郎左衛門	1603.12.8	熊本	35
マグダレナ南	1603.12.9	八代	33
ルドビコ南	"	"	7
シモン竹田五兵衛	"	"	3
アグネス竹田	"	"	30
ヨハンナ竹田	"	"	
ヨアキム渡辺次郎左衛門	1606.8.16	"	55
ミカエル三石彦右衛門	1609.2.4	"	50
トマス三石	"	"	13
ヨハネ服部甚五郎	"	"	39
ペトロ服部	"	"	5

八代の殉教者（11人）福岡教区

# 闇から光へ

## 萩・山口（はぎ・やまぐち）の殉教者



取材協力  
結城了悟神父  
(イエズス会)

萩城跡



広島市内の太田川を遡ると備前高松城があります。この城で生まれ育った熊谷元直は、毛利輝元の重臣として仕えるようになります。闇に包まれた戦国時代末期の1586年、熊谷は毛利軍に従い、島津氏討伐のため九州へ赴き、そこでキリシタン大名の黒田孝高に出会い、彼の影響のもとで洗礼を受けます。戦時下ということもあり、そんなに熱心な信仰生活を送ってはいませんでした。1600年の関ヶ原の戦いを境に外様大名となった毛利輝元は、中国地方

萩・山口の殉教者（2人）広島教区

殉教者名	殉教年月日	殉教地	年齢
メルキオール熊谷豊前守元直	1605.8.16	萩	50
ダミアン	1605.8.19	山口	45

の八つの国を支配していたものの、徐々に国を失い、最後には山口と萩の二つだけになってしまいます。このころ、熊谷はキリスト教に光を見いだし、とても熱心な信仰生活を送り始めます。特に司祭不在であった教会に責任を感じ、信者たちの育成に励みました。同じ頃、「毛利家が二つの国だけになってしまったのは、自分の領地にキリシタンがいるからだ」と僧侶たちが陳情し、以来、毛利輝元はキリシタンに対する取り締まりを強化します。毛利は再三、熊谷に「信仰を捨てるように」と促しますが、彼は「捨てない」と。

そのころ、熊谷は萩に自分の領地を持ち、そこに小さな教会を造って家来たちを信仰へと導き、一家も洗礼を受けました。毛利は熊谷が信仰を捨てないことに苦慮している矢先、毛利が萩城築城のために働いていた指導者が不正を働きます。毛利はその裁きを熊谷に委ねますが、人に害を加えたくない熊谷は裁きを引き延ばしていきます。それを知った毛利は、「これ幸いとばかりに、犯罪人を処罰せず、熊谷を処罰するように命じます。処罰の本当の理由は、熊谷の信仰の問題でした。ある夜、熊谷を逮捕するため、武士たちが家を取り囲みます。初めは、なぎなたを使って抵抗していましたが、キリストの受難を思い、武器を捨て、縄を差し



出し、「これで縛って大名の前に引つ張って行ってください」と言っただけという宣教師の記録が残っています。「この侍はよくキリストの受難を黙想する人だった」とも記されています。キリストのように縛られ、大名の前に連行されないで、萩で殉教します。1605年8月16日のことでした。享年50歳

熊谷の死から三日後、毛利輝元は山口教会のもう一人の支柱ダミアンを捕らえます。彼は大阪の堺に生まれ、盲人でありながらも琵琶法師として、全国各地を遍路し、やがて山口に住み着きます。話が上手で、ユーモアのセンスも…。若い時から強い性格で、僧侶と議論したこともありました。一つのエピソードとして、ある僧侶が説教していた時、ダミアンと議論になります。僧侶はダミアンを邪魔に思い、お寺から追いついて扉を閉め、中に入らないようにしました。ダミアンは扉を強く叩き、「説教を聞きたい!」と言ったので、僧侶は根負けして、中に入れたものの、ダミアンの質問責めは続き、僧侶はとても困り果てました。

ダミアンはやがて山口で結婚し、そこで25歳の時に洗礼を受けます。その際、「ダミアン」という洗礼名をいただきました。その時から彼の心にはキリストの光がしっかりと浸透し、宣教師の一人として成長し

ていきます。

ある日、ダミアンは広島へ行き、宣教師のコーロス神父に「神父様、葬式の祈りを一回唱えていただけませんか」と頼みます。神父が葬式の祈りを唱えると、ダミアンは「はい、分かりました」と言って、祈りを全部暗記してしまいます。山口に戻り、信者が亡くなると、暗記した葬式の祈りを全部唱えていました。

1605年8月19日、毛利は二人の役人を山口に送ってダミアンを呼びます。彼はその時宣教に出かけていましたが、家に帰って奥さんから役人のことを聞くと、「ああ、これは私を殺すためだ」と察知します。役人たちが再びやってきて、「信仰を捨てるように」と説得しますが、彼はきつぱりと断ります。それなら他の信者に気づかれないように、役人たちは「湯田で仕事があるからそちらへ行きましょう」と夜中にダミアンを馬に乗せて連行します。ところが途中でダミアンは自分の馬を止め、「これは湯田の道ではない」と言ったので、みんな驚きます。盲人のダミアンは笑いながら「盲人の私にとつては、昼でも夜でもすべての道は明るい」と。やがて処刑場に到着、馬から下りてひざまずいて祈っている間にダミアンは首を斬られました。享年45歳